

演題名：ヘルスサービスリサーチ講座の概要と研究活動の紹介

演者名：木村悠哉、磯貝俊明、麻生将太郎

ヘルスサービスリサーチ講座の概要

- 名称：ヘルスサービスリサーチ講座
- 設置年月日：2024/04/01～2027/03/31
(第1期(2016-2021)、第2期(2021-2024)を経て更新)
- 資金提供企業：株式会社ツムラ
(研究結果の独立性を担保するため、研究計画と結果公表は東京大学に委ねられている)
- メンバー：
木村悠哉(特任助教)
磯貝俊明(特任研究員)
麻生将太郎(特任准教授)
- 講座の目的：
超高齢社会における持続可能な医療の実現に向け、臨床医学・疫学・医療経済学を横断するヘルスサービスリサーチを発展させるとともに、研究者を育成する。

研究領域は医療ビッグデータを用いた、

- 各種疾病の臨床疫学研究
- 西洋医学・漢方医学を含む要素技術の効果分析・医療経済分析
- 超高齢化と医療サービス必要量の分析
- 医療資源(人員・施設・設備)の効率的配分の分析

期待される効果：

より良い医療サービス提供のための有効な仕組みを明らかにし、国内外へ発信することで、国益に資する。

研究例1：OTC類似薬の処方量・処方コストの全国記述研究(患者・医療機関の特性別)

背景

日本では2025年現在、OTC(Over-the-counter)医薬品と同一または類似成分を含む『OTC類似薬』の保険給付や自己負担の見直しが政策的に議論されている。しかし、全国レベルでの処方量・コストの規模や、患者特性別の分布に関するデータは限られていた。

- 方法
NDB Open Dataを用いた全国記述研究。NDB Open Dataは、ほぼ全国民をカバーしたレセプトデータベースであるNDBの集計データであり、代表的な薬剤の全国処方実態とそれを性別・年齢別に分けたデータを提供している。

NDB Open Dataを用いて、2018-2023年度のOTC類似薬の処方量・コストを集計し、性別・年齢別に層別化した。

OTC類似薬の対象は、日常臨床で処方される頻度が高く、かつ、政策議論の的として取り上げられているものに限定した。具体的には、アセトアミノフェン、nonsteroidal anti-inflammatory drugs (NSAIDs)、貼付剤、第2世代抗ヒスタミン薬、ヘパリノイド含有外用剤の5カテゴリとした。

- 結果
2023年度、5カテゴリ合計で全国174億処方(国民1人当たり140処方)・総コスト2,881億円(国民1人当たり2,317円)であった。処方量の上位3カテゴリは、ヘパリノイド含有外用剤58億処方(47/人)、貼付剤44億処方(36/人)、第2世代抗ヒスタミン薬39億処方(32/人)であった(Figure 1)。コストの上位3カテゴリは、第2世代抗ヒスタミン薬1,092億円(878円/人)、貼付剤856億円(688円/人)、ヘパリノイド含有外用剤661億円(532円/人)であった。

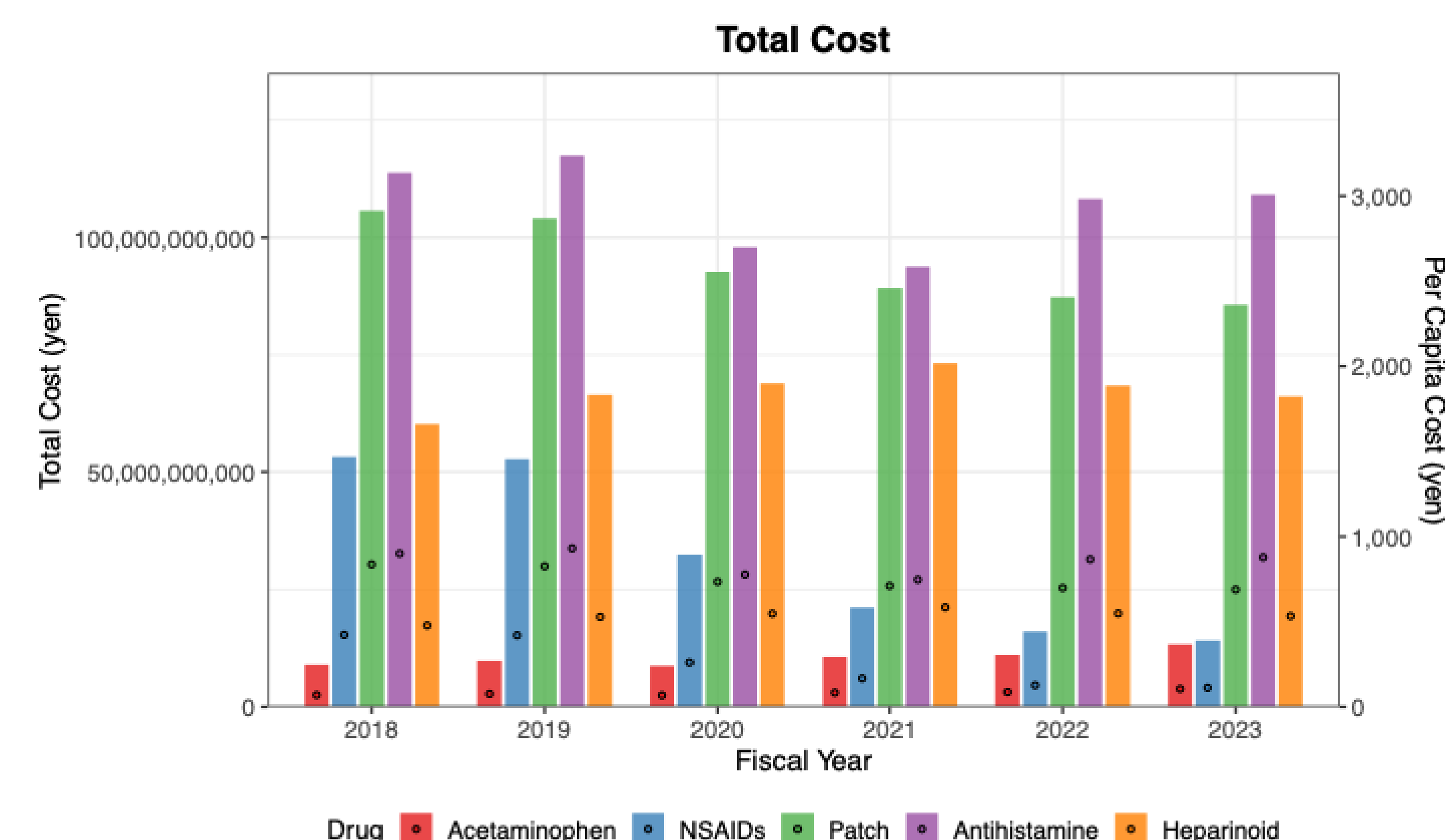
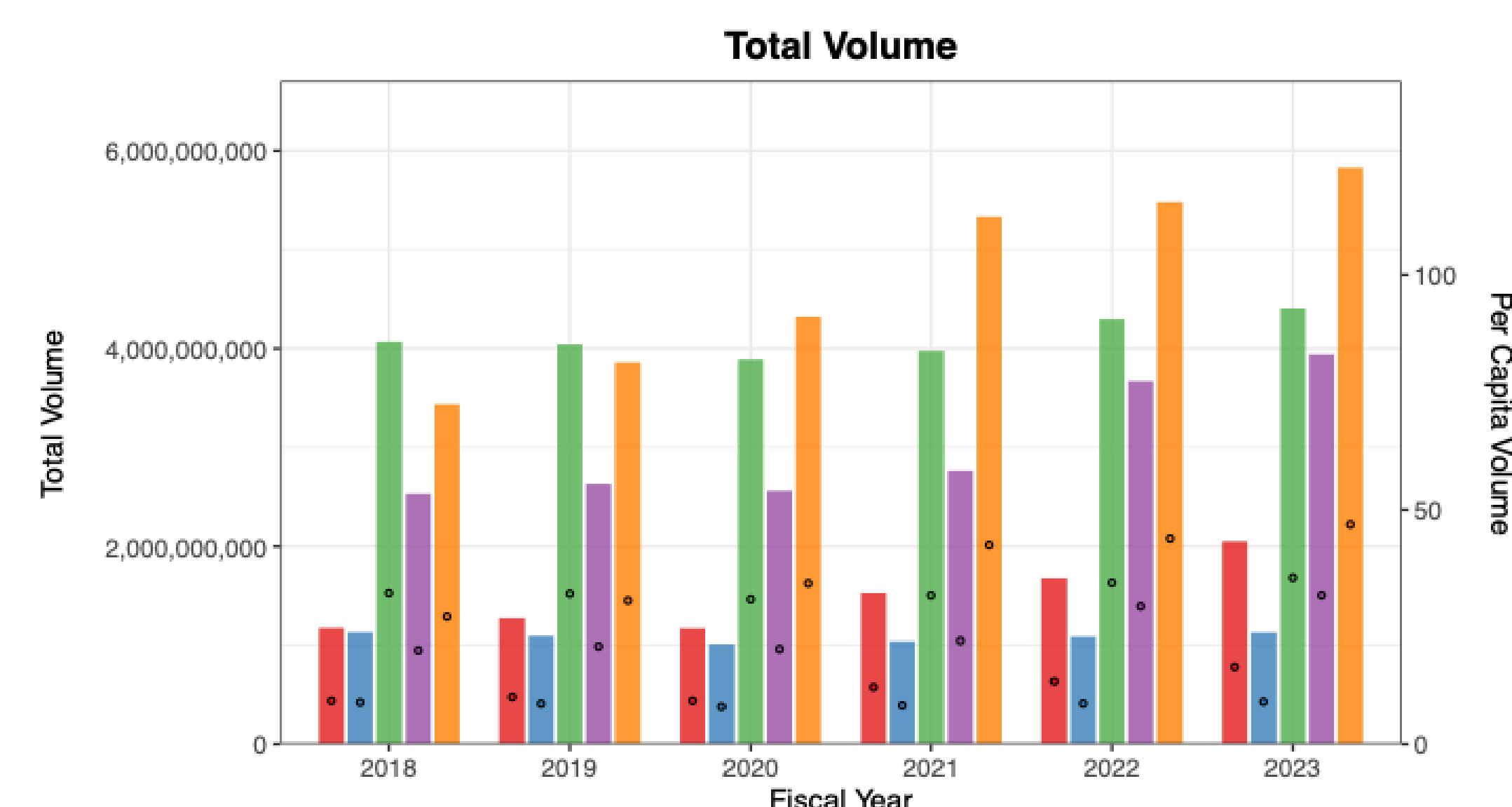


Figure 1. OTC類似薬の処方量(上)とコスト(下)

- 結果(続き)
性別では、2023年度の5カテゴリ合計の処方量(国民1人当たり)は男性71億処方(117/人)、女性103億処方(161/人)であった。総コスト(国民1人当たり)は男性1,165億円(1,925円/人)、女性1,716億円(2,687円/人)であった。年齢別では、5カテゴリ合計の1人当たり処方量は0-64歳107、65-74歳155、75歳以上272であり、1人当たりコストは0-64歳1,748円、65-74歳2,729円、75歳以上4,481円であった。
- 考察
代表的なOTC類似薬の処方量・処方コストの実態を全国規模で数値化した。また、それらの値は患者の性別・年齢により大きく異なることを示した。

研究例2：喘息増悪入院患者における小青竜湯使用と静注ステロイド量の関連

- 背景
小青竜湯は日本で喘息増悪時に用いられることがある一方、実臨床における有効性(特に入院患者での静注ステロイド使用量や臨床アウトカム)に関する大規模データでの検証は限られていた。

- 方法
DPC(Diagnosis Procedure Combination)データベース(2010年7月～2022年3月)を用いた後ろ向きコホート研究。DPCデータベースは全国の急性期病院から構成される入院データベースで、診断名、入院中の処置・投薬、転帰、在院日数などの診療情報を含む。

18歳以上の喘息増悪入院患者を対象とし、入院3日以内に小青竜湯を使用した群と非使用群を比較した。propensity score overlap weightingを用いて背景因子を調整した。

アウトカムは、退院生存患者における入院中の静注ステロイド総投与量(prednisolone換算)、とした。

- 結果
対象は51,459例で、小青竜湯使用は131例であった。propensity score overlap weightingによる調整後、静注ステロイド総投与量(prednisolone換算)の平均は小青竜湯使用群67mg、非使用群149mgで、差-80mg(95%CI -68 to -92)であった。

- 考察
喘息増悪による入院において、小青竜湯の使用は静注ステロイド総投与量の減少と相関した。未測定交絡などの限界があるため、他の研究での検証が必要である。